慶應義塾 医学部新聞
発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160－8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員について は会費に含まれる
に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

第15回 慶應医学賞決まる

世界注目の「自然免疫」研究者が受賞

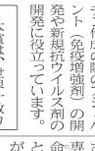
慶應医学賞は、世界の医学・生命科学の領域において医学を中心とした諸学の発展に寄与する顕著、かつ創造的な研究業績をあげた研究者を顕彰するもので、1996年より25名の研究者に対し授与しています。第15回を迎えた今年度の慶應医学賞受賞者は審良静男博士（大阪大学免疫学フロンティア研究センター拠点長）、Jules A Hofmann博士（フランス国立科学研究センター細胞分子生物学研究所、ストラスブール大学教授）の2名に決定し、慶應医学賞審査委員会は左記のとおり受賞理由を発表致しました。

受賞研究テーマ「自然免疫システムにおける微生物識と免疫応答機構の解明」

審良 静男（あきら しずお） 博士
大阪大学免疫学フロンティア研究センター拠点長

動物の免疫系は自然免疫と獲得免疫に大別されます。獲得免疫のリンパ球が、T細胞・B細胞受容体を介して微生物等を認識・反応する機構は詳細に理解されていましたが、樹状細胞やマクロファージなどの自然免疫系細胞が微生物等を認識して反応する機構は十分に解明されていませんでした。これらの免疫応答の鍵となるTLRファミリーの遺伝ノックアウトマウスの作製を行い、TLR9が病原体DNAを認識するなど各TLRに対応する微生物成分の同定を行いました。

また、炎症性サイトカインやインターフェロンなどの産生につながるTLRの下流シグナル伝達系の解明、TLR以外の微生物認識受容体（TLR以外の微生物感知システムも明らかにし、自然免疫応答の分子機構の解明に多大なる貢献をされました。これらの研究成果は、今後、疾患の発現病態のさらなる解明と免疫制御法の開発に役立つと考えられます。さらに、RIG-Iなどのウイルス感知システムの研究成果は、慶應医学賞に相応しいと考えられます。



受賞研究テーマ「昆虫における自然免疫システムとTol三量体の発見」

Jules A. Hofmann 博士
ジュール A. ホフマン
フランス国立科学研究センター細胞分子生物学研究所、ストラスブール大学教授

自然免疫システムは、侵入した細菌などの異物をいち早く取り除くための重要な生体防御機構です。その分子機構、特に微生物の認識機構はプレークスルーとなり、Toll-like receptor（TLR）が次々に発見され自然免疫システムの理解が一挙に進みました。

Hofmann博士は、昆虫（ショウジョウバエ）を用いて自然免疫システムについて研究をおこなっていました。Hofmann博士らはカビに抗性を与えるTollNF-κB, IκBといった、元々身中や腹の軸を決定することが知られていた遺伝子群の変異株を用いて、これらの遺伝子群がカビの抵抗性などの自然免疫に関与することを最初に示しました。Tol三量体システムの発見以降、Hofmann博士らは、自然免疫系がどのようにして細菌を認識しているかという重要な課題に取り組み、細菌の外殻であるペプチドグリカンを認識する分子の同定、解析を発展させ、これらの研究成果はヒトの免疫システムの理解、作成の際のアジュバント（免疫増強剤）の開発に役立っています。

本賞は、世界十数カ国の著名な研究者およびその研究機関から推薦された候補者の中から、学内外の著名な審査員による厳しい審査を経て、受賞者を決定しております。受賞者には賞状とメダルおよび賞金が贈呈され、この年は11月29日（月）に北里記念医学図書館2階北里講堂にて授賞式および受賞記念講演会を開催致します。

三四会会員の参加を請う

慶應義塾大学関連病院会会長　松本 純夫
東京医療センター

慶應義塾大学関連病院会は医学部各教室と密接に連携しながら、医療プログラムに関して、「よりよい連携を目指して」を主題とするパネルディスカッションを企画しました。三四会会員にも後援をいただきました

慶應義塾大学関連病院長会は国立栃木病院　鎌田竹次郎院長（1回生）を初代会長として昭和39年に発足し8代目済生会横浜市病院　山本修三院長（38回生）のとき平成13年に名称を関連病院会と改称し、院長以外でも病院を代表できる三四会である。……慶應医学部はもちろんのこと、発足以来、慶應義塾大学医学部の卒業教育の一翼を担う気概を元に運営されてきました。しかし昭和55年医学部新棟3534番地の座談会では「まず関連病院長会発足の原点に立ってみる。慶應は……」と、慶應は……国立大学とは異なる考え方で、福澤精神に則り、大成13年に名称を関連病院会と改称し、院長以外でも病院を代表できる三四会である。……慶應医学部はもちろんのこと、発足以来、慶應義塾大学医学部教授、須田年生（医学部教授）、田村悦臣（薬学部教授）、豊島久眞男（独立行政法人理化学研究所研究顧問）、垣生園子（順天堂大学医学部客員教授）、日比紀文（産業技術研究所フェロー兼ラボ長）、阿部薫（医学部教授）、御子柴克彦（医学部教授）、田村裕子（チームリーダー）、吉村昭彦（医学部教授）【敬称略・五十音順】

ずず、指導的地位にいるものが外部に進出すべきであるようにしまして参加する会員であれば会員であれば、発足以来、慶應義塾大学医学部・施設長に連絡はするが、施設長は連絡しないこともあります。

平成16年に開始された医師初期臨床研修義務化により、医師の数が急増したことは周知の事ですが、関連病院に取り組まざるを得ない現実があり、大きく変化しています。

一方、医学部内において、医学部内の意識改革が必要であり、診療科ごとに派遣した関連病院の指導医側からも院長のみだけでなく、医長を始めとした三四会会員に広く参加してもらうことを希望しています。

[外52回]

飯塚理八記念資料室と道東から発信する

〝ヒトの生命を創造し、育む医療〟の推進

末岡 浩（59回）

飯塚理八会長教授（27回）が逝去されて3年が経過したが、生地釧路の地元の運動として、新設される釧路市医師会看護専門学校内に〝ヒトの生命を創造し、育む医療〟と名付けられた記念資料室が開設された。

少子高齢化と共に医療の偏在化が社会問題となるなかで、道東の状況は厳しい現実に直面している。この運動はこの地域から発信する新たな生命を創造する医療を推進しつつ、ヒトの生命を創造し、育む医療の推進事業の活動として第1回講演会が8000名収容の釧路市生涯学習センター大ホールで、「産んで育てられる社会を作ろう」を謳った。

問題解決の道のりは容易ではないが、地域住民・県政・首都圏など他地域の医師、そしてコメディカスタッフの育成も含め、多面的な努力が必要であることを結論づけられた。

今後この活動は、飯塚理八記念資料室を発信基地として、故人の意志を継続し、その活に役立てられることである。

（なお、入館・看護学者は、釧路市医師会看護専門学校http://www.kushin-ishikai.co.jp/school/、釧路市弥生－44－12TEL0154－44－7686まで連絡入さい。）

記念講演会の様子

飯塚理八記念資料室を来訪した一行

飯塚理八記念資料室開設によせて

産婦人科学教室同窓会　持丸 文雄（52回）

平成22年6月5日、故飯塚理八産婦人科名誉教授（座長先生42回）ご夫妻、高橋先生（42回）ご夫妻、高橋先生（39回）など縁の深い方々とともに釧路空港に到着、車に乗して市内に向かった。幹線道路の両側に広がる釧路台地は一面の緑に覆われた。小生も飯塚先生の誕生の地である釧路市に赴いて、ホテルに泊った。翌朝、釧路駅に集合し、釧路市医師会の案内で、まず、産婦人科医療の問題点と対策、IT を用いた遠隔医療プランの説明を受けた。午前に市街を通って約30分の行程で眺望のよい野菜であり、市街地では、加藤産婦人科医院の見学をした。午後は、先生が会場となった第3回記念資料室に移動する。

講演会を終えると日頃、中心街から車で10分ほど南に向かうと、太平洋を望む一角に建新しい釧路市医師会看護専門学校が聳立している。釧路名物飯塚理八産婦人科医院の発足は後に、RIG-Iなどのウイルス感知システムの研究成果と、発展している。さらに、RIG-Iなどのウイルス感知システムの研究成果と、発展している。

ホテルを経て、定員120名の看護学生に会場の釧路市市生涯学習センターに到着、大ホールの一隅に「同窓」の席を占めた。釧路はじめ釧路医師会などの共催と北海道教育局、釧路市小中学校長会や釧路市PTA連合会などの後援もあって、趣旨説明が行われる。1階に設けられた釧路市